

ヨエル書とラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第29号

Jeff Pippenger

2026-01-14

二十九番

マタイによる福音書にある第五のメシア預言は、失望と死の道標である。2020年7月18日、ナッシュビルの破壊に関する偽りの予言が、エリヤとモーセを殺した。

第五のメシア的な道標は、2020年7月18日の失望である。

そのとき、預言者エレミヤによって語られたことが成就した。「ラマで声が聞こえた。嘆きと涙、そして大いなる悲しみ。ラケルはその子らのために泣き、慰められようとしな。彼らがないからである。」マタイによる福音書 2:17、18

予測

主はこう仰せられる。ラマから嘆きと激しい泣き声が聞こえる。ラケルがその子らのために泣き、その子らのことで慰められようとしな。彼らがもういないからだ。エレミヤ書 31:15。

モーセとエリヤはソドムとエジプトの通りで殺される。旧約聖書の最後の言葉は、主の大いなる恐るべき日の前にエリヤが来ることを明言している。その恐るべき日は、ダニエル書12章でミカエルが立ち上がる時に始まり、彼は黙示録22章で「正しい者と不義な者」はその状態のまま永遠にとどまると告げる。

その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君ミカエルが立ち上がる。その時には、国が存在して以来その時までかつてなかったほどの苦難の時が訪れる。その時、あなたの民のうち、書に名が記されている者は皆、救い出される。ダニエル書 12:1

不義を行う者は、なおも不義を行え。汚れた者は、なおも汚れたままでいよ。正しい者は、なおも正しくあれ。聖なる者は、なおも聖くあれ。ヨハネの黙示録 22:11

エリヤは恩恵期間が閉じる前に現れなければならず、恩恵期間が閉じる直前に黙示録11章で殺されて復活する。彼は復活して恩恵期間が閉じるまでそのメッセージを述べ、その時に義人と悪人のもう一つの復活がある。

そして、地の塵の中に眠っている者のうちの多くが目を覚まし、ある者は永遠のいのちへ、ある者は恥と永遠の侮蔑へと至る。ダニエル書 12:2

その特別な復活の後にキリストの再臨があり、その際に義人の死者が復活し、続いて聖徒たちが失われた者たちを裁く千年期がある。千年期の終わりには、さらに別の復活とキリストの三度目の来臨がある。預言的な復活の系譜には教皇権の獣の復活が含まれているが、それぞれの復活は神の預言の御言葉における固有の主題である。2020年7月18日、十

四万四千人のラオデキヤ運動は、1844年以降の時の定めを禁じるキリストの命令に反逆することによって自殺した。

そのとき、ラマで声が聞こえた。ラマは高慢と自己高揚を意味する。良い旅人を意味するラケルは、モーセとエリヤがいなかったために嘆き悲しんでおり、さらに重要なことに、彼らは慰められない。彼らには慰めがなく、聖霊こそ慰め主であり、その慰め主は、荒野で叫ぶ声が2023年7月に始まったときに遣わされるはずであった。

これらのことは、猶予期間が終わる直前に起こる。そして黙示録によれば、猶予期間が終わる直前に、イエス・キリストの黙示の封印が解かれる。その封印の解除こそが、モーセとエリヤをよみがえらせるのであり、彼らはまた、良き旅人であるラケルでもあって、彼女は自分の子どもたちのために泣き嘆き、慰められなかった。その子どもたちがよみがえらされるとき、彼女の嘆きは喜びへと変わる。

彼は私に言った。「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近いからである。」
黙示録 22:10

ソドムとエジプトの通りでモーセとエリヤは死んでいた。そしてキリストと同じように、2023年7月に集まりが始まったとき、十四万四千人はエジプトから呼び出されることになった。

第六のメシア的な道しるべは、2023年7月のエジプトからの召し出しである。

そしてヘロデが死ぬまで、そこにいた。これは、主が預言者を通して「エジプトからわが子呼び出した」と言われたことが成就するためであった。マタイ 2:15

予測

イスラエルがまだ幼かったとき、わたしは彼を愛し、エジプトからわが子呼び出した。ホセア書 11:1。

エジプトの街路に死が横たわるなか、荒野からの天の声がエゼキエルの死骨の谷に命を吹き込む。その声は2023年7月に響き始めた。

そして三日半の後、神からのいのちの霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らを見た者たちの上に大いなる恐れが臨んだ。彼らは天から「ここに上って来なさい」と告げる大きな声を聞いた。すると彼らは雲に包まれて天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。黙示録 11:11、12。

神はその御子をエジプトから呼び出され、またモーセをもエジプトから呼び出された。というのも、アルファとしてのモーセとオメガとしてのイエスは、モーセと小羊の歌を歌う十四万四千人の経験を表しているからである。その歌には、エジプトからの召し出しが含まれている。エゼキエル書には二つの段階が示されており、それはアダムの創造における二つの段階によって前表されている。まず身体が形づくられ、その後、いのちの息がその身体に吹き込まれ、こうして生きるようになる。黙示録十一章では、第一の段階は、神の霊が打ち殺された者たちのうちに入ることであり、彼らはその後、自分の足で立ち上がった。彼らが立つとき、彼らは神の軍勢である。十一章において霊を運ぶものは、エゼ

キエルの第一の預言によって表されている。荒野で叫ぶ声とは、聖霊を伴う預言的メッセージである。

マタイによる福音書には、十四万四千人との契約を表す二人の証人を示す創世記の十二章に対するオメガとなる十二章が含まれている。その男女は、神性が彼らの人間性と結び合わされた関係のうちに、永遠に封印される。彼らは第十一時の労働者のためのしるしとなる。

聖霊の働きは、世に罪と義と裁きとを悟らせることである。世が警告を受けることができるのは、真理を信じる者たちが真理によって聖められ、崇高で聖なる原則に従って行動し、神の戒めを守る者とそれを足で踏みにじる者との間の境界線を、高尚な意味において示しているのを見ることによるのみである。聖霊による聖化は、神の印を持つ者と、偽りの安息日を守る者との違いを明確にする。試練が来るとき、獣の刻印が何であるかがはっきり示される。それは日曜日を守ることである。真理を聞いた後でもなおこの日を聖なるものと見なし守り続ける者は、時と律法を変えようと考えた罪の人の印を帯びている。聖書訓練学校、1903年12月1日。

十四万四千人の旗印について言えば、黙示録11章で彼らが天に引き上げられるとき、彼らはまず、彼らが殺された場所であるエジプトから呼び出される。荒野からの声が彼らをエジプトから呼び出す。彼らが第十一時の労働者たちのためのしるしとなるためである。彼らの2024年の復活は、どのたとえが示されているかによって、誕生として、また目覚めとしても表される。誕生という観点では、彼らは十人の乙女のたとえを成就する者たちであり、この意味で彼らの誕生は処女降誕であり、彼らこそがそのしるしである。

第七のメシア的な道しるべは2024年である

これらのことがすべて起こったのは、主が預言者を通して語られたことが成就するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産み、その名はインマヌエルと呼ばれる。」これは訳すと「神は私たちと共におられる」という意味である。マタイによる福音書 1:22、23

予測

それゆえ、主ご自身があなたがたにしるしをお与えになる。見よ、おとめがみごもって男の子を産み、その名はインマヌエルと呼ばれる。イザヤ書 7:14

モーセやキリストの歴史にしるしがあったように、ミラー派の歴史にもしるしがあった。終わりの時代には、ラオデキア的アドベンチズムはしるしを求めるが、彼らに与えられる唯一のしるしはヨナのしるしである。2024年によみがえる者たちにも、しるしがある。彼らのしるしは、レビ記26章の「七つの時」である。

これはあなたへのしるしとなる。あなたがたは今年には自生するものを食べ、第二年にはそれから芽生えるものを食べ、第三年には種をまき、刈り取り、ぶどうの木を植え、その実を食べる。ユダの家の逃れた残りの者は、再び下に根を張り、上に向かって実を結ぶ。というのは、エルサレムからは残りの者が出て行き、シオンの山からは逃れた者たちが出るからである。万軍の主の熱心がこれをなす。列王記下 19:29-31。

もしあなたがたが、「七年目には何を食べるのですか。見よ、私たちは種をまかず、収穫も取り入れません」と言うなら、わたしは六年目にあなたがたのために祝福を命じ、それが三年分の実りを生じさせる。あなたがたは八年目に種をまき、九年目までなお古い実を食べる。その年の実りが入るまで、あなたがたは古い蓄えを食べる。レビ記 25:20-22

逃れた者たちは、イスラエルの逐われた者としても示されており、彼らを憎む同胞によって追い出された。彼らの同胞は、モーセの「七たび」によって示される安息日の真理を論破できなかつたため、彼らを憎んで追い出した。

主はエルサレムを築き上げ、イスラエルの散らされた者たちを集められる。詩編 147:2.

主は2023年7月に残りの者たちを集め始められ、その残りの者たちはイスラエルの「追いやられた者たち」である。2023年7月、主はご自分の追いやられた者たちを集めるために、再び御手を伸ばされた。1856年のモーセの「七つの時」のオメガの光に先立って、1849年にも二度目に御手を伸ばされた。アルファの光は、ミラーの最初の預言的発見-モーセの「七つの時」-によって表された。

その日、エッサイの根が民のための旗印として立ち、異邦人はそれを求め、その安息は栄光に輝く。その日、主は再び、二度目に御手を伸ばして、アッシリア、エジプト、パトロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、そして海の島々から、残されているご自分の民の残りの者を取り戻される。主は諸国のために旗印を掲げ、イスラエルの追い散らされた者を集め、地の四隅からユダの散らされた者を集められる。イザヤ書 11:10-12.

追放された者たちがしるしとして掲げられるとき、彼らは十一時の働き手たちを集めるだろう。その十一時の働き手たちは、「神の印を持つ者と偽の安息日を守る者との違い」を「見ることによってのみ」警告を受けうる者たちである。十一時の働き手たちにとってのしるしは追放された者たちであり、追放された者たちのしるしは、次の謎である。「今年には自生するものを食べ、第二年にはその自生から出るものを食べ、第三年には種を蒔き、刈り取り、ぶどう畑を植えて、その実を食べよ。」

この箇所の謎は、それがレビ記25章と26章の「七倍」を表しているという点にある。地の安息、すなわち土地を休ませることは、約束の地における七年目の安息を守るか拒むかに応じて祝福か呪いかを指し示す、契約の一要素である。十四万四千人のしるしは、地の七年目の安息によって表されている、契約における三重の約束の一要素である。「七倍」の根本的な真理は、新しい心と思い、新しい体、そして住む地を約束するこの契約の三つの要素のうちの一つを指し示している。

第七日の安息日は、神とその民との間のしるしであるが、その第七日の安息日はまた、古代イスラエルに与えられた契約上の責務をも表している。彼らは十戒の保護者、保管者とされるはずであった。ホワイト夫人は、1844年に、現代のイスラエルが古代イスラエルと同様に、十戒だけでなく神の預言のことばの保管者とされたことを明確に述べている。

神はこの時代に、古代イスラエルをお召しになったと同様に、ご自分の教会を地上にあって光として立たせるよう召された。真理という力強い大なた、すなわち第一、第二、第三の天使のメッセージによって、神は彼らをご自身の聖なる御もとに引き寄せるために、彼らを諸教会およびこの世から分離された。彼は彼らを御自分の律法の保管者とし、この時のための大いなる預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに委ねられた聖なる神託と同様に、これらは世界に伝えるべき聖なる委託である。黙示録14章の三天使は、神のメッセージの光を受け入れ、地の隅々に至るまで警告を響かせるために神の使者として出て行く人々を表している。『証言』第5巻、455頁。

十戒は第七日安息日のしるしによって象徴され、預言の律法は第七年の安息年によって象徴される。ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチズムは、寝返って太陽を礼拝し始めるとき、大いに恥をかくことになるが、彼らが最初に退けた安息日の戒めこそ、モーセの「七たび」である。

約束の地を受け継ぐためには、神の民は、第七日の安息日だけでなく、七年目の安息年も理解し、堅く守らなければならない。ラオデキア的アドベンチズムは、それを偽りで覆い隠してはいるが、この聖書的真理を反駁することはできない。これこそが、旗印となる者たちを追い出すに至る彼らの憎しみの根源である。

父の家族のほとんどは再臨を固く信じており、この栄光ある教理を証ししたため、私たち七人は一度にメソジスト教会から除名されました。この時、預言者の言葉は私たちにとってこの上なく尊いものでした。「あなたがたを憎み、わたしの名のゆえにあなたがたを追い出したあなたがたの兄弟たちは、『主はあがめられよ』と言った。しかし主はあなたがたの喜びとなって現れ、彼らは恥を見る。」イザヤ66章5節。

この時から1844年12月に至るまで、私の喜びも、試練も、失望も、身近にいる愛するアドベントの友人たちのそれと同じようなものでした。その折、私はアドベントの姉妹の一人を訪ね、朝には家庭の祭壇のまわりにひざまずいて祈りました。それは興奮に満ちた場ではなく、そこにいたのは私たち五人だけで、皆女性でした。私が祈っていると、かつて感じたことのない神の力が私に臨みました。私は神の栄光の幻に包まれ、地上からますます高く昇っていくかのように思われ、以下に述べるとおり、聖なる都へと向かうアドベントの民の旅路の一端を示されました。Early Writings, 13.

エレン・ホワイトの最初の異象は、（五人の賢い乙女を象徴する）五人の女性が、彼女たちを憎んでいた兄弟たちに追い出され、その後に集まっていたときに与えられた。彼らが彼女たちを憎んだのは再臨の教理のためであり、こうして終わりの日の追い出された者たちを象徴していた。

私は、名ばかりの教会と名ばかりのアドベンチストが、ユダのように、真理に敵対するためにカトリックの影響力を取りつけようとして、私たちをカトリック側に売り渡すのを見た。そのとき聖徒たちは目立たない民となり、カトリックにはほとんど知られていない。しかし、私たちの信仰と慣習を知っている教会や名ばかりのアドベンチスト（彼らは安息日のゆえに私たちを憎み、それを反駁できなかったからである）が、聖徒たちを裏切り、彼らは人々の制度をないがしろにする者だ、すなわち安息日を守り、日曜日を無視している者だとカトリックに密告するだろう。

それからカトリックはプロテスタントに、事を進めて、週の第七日の代わりに週の第一日を守らない者は皆殺されるべきだという布告を出すよう促す。多数を占めるカトリックはプロテスタントの側に立つ。カトリックは自分たちの力を獣の像に与える。そしてプロテスタントは、かつて彼らの母がそうしたように、聖徒たちを滅ぼすために行動する。だが、その布告が実を結ぶ前に、聖徒たちは神の御声によって救い出される。Spalding and Magan, 1, 2.

「『名目上の』（名ばかりの）アドベンチストは、ユダのように私たちをカトリックに売り渡すだろう。」

彼らがそうしたのは、「安息日のゆえに」その追放者たちを「憎んで」いたからである。名目上のアドベンチストは第七日安息日を守ると公言しているのだから、ここで言及されている安息日はそのことを指してはいない。彼らが追放者たちを憎むのは、モーセの「七つの時」という根本的真理——それはウィリアム・ミラーという人物におけるエリヤのアルファの理解であった——を反駁できないと知っているからである。

「神は私たちに新しいメッセージを与えておられるのではありません。私たちは、1843年と1844年に私たちを他の教会から引き出したそのメッセージを宣べ伝えるべきです。」『レビュー・アンド・ヘラルド』1905年1月19日。

「1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、いま力強く伝えられるべきである。なぜなら、方向を見失っている人々が多くいるからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられるべきである。」『Manuscript Releases』第21巻、437頁。

「1841年、42年、43年、44年に私たちが受けた真理は、今や研究され、宣べ伝えられるべきである。」『Manuscript Releases』第15巻、371ページ。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

ユダは、サドカイ人とパリサイ人から成るサンヘドリンの象徴ではない。ユダは十二弟子の一人だった。彼は契約の花嫁を構成する者の一人であり、キリストは五旬節にその花嫁と結ばれようとしていた。追放された者たちに対する裏切りは、ユダ、すなわちラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会から来る。彼らは多くの象徴で表されており、たとえばマラキ書3章で契約の使者に退けられるレビ人などである。その清めの時にレビ人は選り分けられ、忠実であろうと不忠実であろうと、その数は25である。レビ人は、かつてのように、供え物としてささげられる前に清められる。

彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金銀のように精錬して、彼らが主に義のささげ物をささげることができるようにする。そのとき、ユダと

エルサレムのささげ物は、昔の日々のように、往年のように、主に喜ばれるものとなる。マラキ書 3:3、4。

レビ人は捧げ物である。なぜなら、彼らは大いなる捧げ物であるキリストの品性を完全に映し出しているからだ。その25人のレビ人が捧げ物として高く掲げられるとき、エゼキエル書8章では、25人の偽のレビ人が太陽に向かってひれ伏している。

ユダは邪悪なレビ人を象徴するだけでなく、ユダの三十枚の銀貨が示すように、三十年間備えられてきた邪悪な祭司でもある。

そのとき、彼を裏切ったユダは、イエスが有罪とされたのを見て後悔し、銀貨三十枚を祭司長たちと長老たちのもとへ返しに行き言った。「私は罪を犯しました。罪のない人の血を売り渡してしまったのです。」しかし彼らは言った。「それが我々に何の関わりがあるのか。自分で始末するがよい。」そこで彼は銀貨を神殿に投げ入れ、立ち去り、行って首をつった。マタイによる福音書 27章3-5節。

ユダが投げ捨てた三十枚の銀貨は、マラキ書3章において契約の使者が不純物（まがい物の銀）を除き去る（浄化する）ことを表している。その邪悪な祭司職は、コラ、ダタン、アビラムの反逆と、1888年の反逆者たちによって象徴されていた。米国、すなわち地の獣がその口を開くとき、邪悪な祭司職は飲み込まれる。そして、日曜法に始まる後の雨が完全に注がれる間に、火が彼らの追隨者を滅ぼす。

キリストの時代におけるしるしとしての処女降誕は、終わりの時における賢いおとめたちのしるしを表している。その時期、サンヘドリン、すなわちラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会はしるしを求めるが、ラオデキアに与えられた唯一のしるしを見ることができない。大群衆、すなわち十一時の働き手たちへのしるしは、日曜法の試練期に男女が第七日安息日を守っているのを見ることである。先の契約の民との論争における残りの民のしるしは安息年であり、それは、ハバククの聖なる両方の表の中心の柱として示されているアドベンチズムの基礎を表している。ラオデキア的アドベンチズムに与えられたしるしはヨナのしるしであり、それはキリストとペテロの対話の中で取り上げられている。

イエスがカイサリア・フィリピの地方に来られたとき、弟子たちに尋ねて言われた。「人々は、人の子であるわたしをだれだと言っているか」。彼らは言った。「ある人々は、あなたはバプテスマのヨハネだと言ひ、ほかにはエリヤだと言う者もあり、また、エレミヤ、あるいは預言者のひとりだと言う者もいます」。彼は彼らに言われた。「では、あなたがたはわたしをだれだと言うか」。

するとシモン・ペテロが答えて言った。「あなたはキリスト、生ける神の御子です。」イエスは彼に答えて言われた。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いです。これをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。わたしもあなたに言ひます。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。陰府の門もそれに打ち勝つことはできません。わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐものは、天でもつながれます。あなたが地上で解くものは、天でも解かれます。」

そのとき、イエスは弟子たちに、自分がキリストであることをだれにも言ってはならないと命じた。マタイによる福音書 16:13-20

サンヘドリンに対する、そしてひいてはアドベンティズムに対するしるしは、ヨナのしるしである。シモン・バルヨナは、名がこれから変えられるがゆえに、「契約の人」の象徴としてこの箇所が登場する。アブラムの名は契約の際に変えられた。サウロの名はパウロに変えられた。ヤコブの名はイスラエルに変えられた。これら三つの証言は、聖書の人物の名が変えられるとき、その人物が契約の人を表し、したがって最後の契約の民、すなわち十四万四千人を型どることを立証している。またこの三つの証言は、契約の人の名が、改名された人物に結びつく預言的象徴を表していることも立証している。サウロという名は「選ばれた者」を意味する。彼は異邦人に福音を携えるために選ばれたからである。彼の名はパウロに変えられたが、その意味は「小さい」である。彼は神の教会を迫害したがゆえに、自分を使徒たちの中で最も小さい者と見なしていたからである。ヤコブという名は「押しつける者」を意味するが、彼は名においても経験においても、イスラエルが意味する通り「勝利者」へと変えられた。ペテロの名はシモンであり、その意味は「聞く者」であった。バルヨナは「ヨナの子」を意味する。

ペテロはヨナの最後の世代を象徴している。というのも、彼はヨナの子だったからである。ヨナは「鳩」を意味し、シモンはその鳩のメッセージを聞いた者であり、シモン・バルヨナは、イエスが洗礼を受けてイエス・キリストとなり、聖霊が鳩の姿で降ったときに、イエスの油注ぎのメッセージを聞いた。ヨナのメッセージとは、イエスの洗礼において、力をもってイエスの油注ぎを象徴した鳩のメッセージであった。ヨナのメッセージは、ヨナが三日間鯨の腹の中にいたこととして表された。その三日間とは、過越から初穂の祭りまでの三日であり、それはキリストの洗礼と、ヨナが鯨の腹の中にいた時とによって象徴されている。

ヨナのしるしは、キリストが洗礼の際に受けた油注ぎのしるしであり、それは9/11における黙示録18章の天使の降臨を象徴している。9/11は、ヨナの三日間によって表されている三段階の試しの過程を開始した。その三つの段階は、ミラー派の歴史にも示されている。1840年8月11日は第一の天使の試しに当たり、1844年4月19日は第二の天使の試しに当たり、1844年10月22日は第三の試しに当たる。これらの三段階は、9/11、2020年7月18日、そして日曜法を表している。

日曜法るとき、ヨナは魚の口から吐き出される。そこはちょうど、キリストがラオディキアをその口から吐き出しておられる場所であり、また、バラムのろばが口を開いて語る場所であり、さらに、バプテスマのヨハネの父ザカリヤが語る場所であり、また同じく、アメリカ合衆国が竜のように語る場所でもある。その後ヨナは、2024年にモーセとエリヤとともに復活した者たちの象徴として、世界に最終の警告を与える。彼らはソドムとエジプトの街路で死に、その後エゼキエルの力強い軍勢として復活する。彼らが復活するとき、彼らはヨナのしるしとなる。というのも、ヨナは、ニネベに最終のメッセージを告げるために死に、復活した者たちを表しているからである。鯨の腹の中のヨナ、獅子の穴のダニエル、煮えたぎる油の釜の中のヨハネは、象徴的な死と復活を経験した十四万四千人を表している。9/11における油注ぎからエゼキエルの力強い軍勢の復活に至るまでが、キリストの洗礼からその復活に至ることを表している。

パリサイ人たちもサドカイ人たちと共に来て、彼を試み、天からのしるしを見せるように求めた。彼は答えて彼らに言われた。「夕方になると、あなたがたは『空が赤いから、晴れるだろう』と言い、また朝には、『今日は荒れ模様だ。空が赤くどんよりしているから』と言う。偽善者たちよ、あなたがたは空模様を見分けることはできるのに、どうして時のしるしを見分けられないのか。邪悪で姦淫の世代はしるしを求める。しかし、その世代には、預言者ヨナのしるしのほかに与えられない。」そして彼は彼らを残して去って行った。マタイによる福音書 16:1-4.

奇跡の頂点はラザロの復活であった。

ラザロのもとへ来るのを遅らせられたのは、キリストが、ご自分を受け入れなかった人々に対して憐れみのご計画をお持ちだったからである。彼はなおしばらくとどまられた。それは、ラザロを死からよみがえらせることによって、頑なで不信の民に対し、ご自分がまことに「よみがえりであり、いのちである」ことのもう一つの証拠をお与えになるためであった。彼は、この民、すなわちイスラエルの家の貧しくさまよう羊に対する望みをすべて捨てることに、どうしても気が進まなかった。彼らが悔い改めないことのゆえに、彼の心は張り裂ける思いであった。その憐れみにおいて、彼は、ご自分こそが回復者、すなわちただお一人でいのちと不死を明るみにもたらし得る方であることを示す、もう一つの証拠を彼らに与えようと定められた。これは、祭司たちが曲解することのできない証拠となるはずであった。彼がベタニヤへ行くのを遅らせられたのは、このためであった。この頂点となる奇跡、すなわちラザロの復活は、彼の業とご自分の神性の主張に、神の印を押すことになるはずであった。『The Desire of Ages』528、529ページ。

キリストはラザロをよみがえらせる前にしばらくとどまられ、ラザロは「冠となる奇跡」であるだけでなく、神の御業への「封印」でもあった。その箇所では、姦淫で邪悪な世代に対する唯一のしるしはヨナのしるしである。封印の過程のタイミングが非常に明確であることを理解することが重要である。私たちが取り上げているペテロの名が変えられる箇所では、その時点からイエスがご自身が殺されることを明らかにし始めたことが知らされるが、マタイは最後の節で「それから、イエスがキリストであることを誰にも話しはしないと、弟子たちにお命じになった」と記している。さらにそのすぐ次の節で、「その時から、イエスは弟子たちに、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを示し始められた」と記している。

この箇所は、イエスが人々は自分を誰だと思っているのかと尋ねるところから始まり、続いて、弟子たちに自分を誰だと思ふのかと尋ねます。

イエスがカイサリヤ・フィリポの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた、「人々は、人の子であるわたしをだれだと言っているか。」彼らは言った、「ある人たちは、あなたはバプテスマのヨハネだと言い、ほかにはエリヤだと言う人もいれば、また、エレミヤ、あるいは預言者の一人だと言う人もいます。」そこでイエスは彼らに言われた、「では、あなたがたはわたしをだれだと言うのか。」
マタイによる福音書16章13-15節

ペテロは答えて、イエスがキリストであり、生ける神の御子であると告白した。「キリスト」という語は、ヘブライ語の「メシア」に当たるギリシャ語である。イエスのご自分が誰であるかという問いを投げかけ、弟子たちをご自分がメシアであるという事実へと導かれたが、直ちに、誰にもそれを言うてはならないと彼らに告げられた。その時から、イエスはマタイの最後の三章にある二十三の道しるべを成就することを教え始めたが、キリストに関する真理は必然的に段階を追って明らかにされる必要があった。

これらのメシア的な道しるべについては、次の記事で続けます。

第三の天使のアルファの光

1846年の秋、私たちは聖書の安息日を守り、それを教え、擁護することを始めた。同年の初めにマサチューセッツ州ニューベッドフォードを訪問していたとき、私は初めて安息日のことに心を留めるようになった。そこで私は、早くから再臨信仰を受け入れ、この働きに積極的に従事していたジョセフ・ベイツ長老と知り合いになった。B長老は安息日を守っており、その重要性を強く説いた。私はその重要性を感じられず、B長老が第四条の戒めを他の九つよりも強調するのは誤りだと思った。しかし主は私に天の聖所の幻を与えられた。天にある神の宮が開かれ、私は憐れみの座で覆われた神の箱を示された。二人の天使が箱の両端に一人ずつ立ち、その翼を憐れみの座の上に広げ、顔をそれに向けていた。私に伴う天使は、これらが、神の指によって書き記された聖なる律法を、畏敬の念をもって仰ぎ見る天の万軍全体を表しているのだと教えた。イエスが箱の蓋を持ち上げられると、十戒が記されている石の板が見えた。十の戒めのまさに中央に第四条の戒めがあり、その周りを柔らかな後光のような光が取り囲んでいるのを見て、私は驚いた。天使は言った。「それは、天と地とその中のすべてのものを創造された生ける神を明確に示している、十のうち唯一の戒めである。地の基が据えられたとき、安息日の基もまた据えられたのだ。」『証言』第1巻、75頁。

第三の天使のオメガの光

神と交わる者は、義の太陽の光のうちを歩む。彼らは、神の前で自分の道を墮落させて、贖い主の名を汚すことはない。天の光が彼らを照らす。地上の歴史の終わりに近づくとつれ、キリストおよび彼に関する預言についての彼らの知識は大いに増し加わる。彼らは神の目には無限の価値がある。なぜなら彼らは御子と一致しているからである。彼らにとって神の言葉は比類なく美しく、美しい。彼らはその重要性を悟る。真理が彼らに開かれる。受肉の教理は柔らかな光彩を帯びる。聖書こそが、あらゆる神秘を解き明かし、あらゆる困難を解決する鍵であることを彼らは理解する。光を受けることも光のうちを歩むことも望まなかった者たちは、敬虔の奥義を理解することができない。しかし、十字架を負ってイエスに従うことをためらわなかった者たちは、神の光のうちに光を見るであろう。『サザン・ウォッチマン』1905年4月4日。